

11 日目 野尻-10.1Km-三留野-3.2Km-妻籠-7.3Km-馬籠 4.6Km-落合-4.1Km-中津川

新宿発の夜行バスで 6/26(金)の朝 5 時に中津川駅着、6 時の電車に乗り 6 時半に前回到達点の十二兼(じゅうにかね)駅に到着、ここは無人駅で最後尾の車掌さんにチケットを渡すことになる。傘をさす程ではない雨がポツリポツリと降っている。

十二兼(じゅうにかね)と南寝覚

南寝覚



十二兼は野尻宿と三留野宿の中間地点、珍しい名なので、何かの言われがあると思いネットで調べたが、表千家流の茶人の堀内十二世である堀内家十二世兼中齋(大正から昭和の人)からきたこと以上のことは分からなかった。木曾川沿いに歩いていくと、柿其(かきそれ)橋から奇岩巨岩の溪谷が見え、寝覚の床に似ていることから「南寝覚め」と呼ばれている。

羅天の栈道

歩いている中山道は木曾川の左岸の山腹を走る国道 19 号線の歩道であるが、旧中山道は右岸の岸壁沿いの栈道であり、島崎藤村の夜明け前には「あるところは岨(そば)づたいに行く崖の道であり」と書かれている場所で、木曾屈指の難所と言われた羅天の栈道があった場所とのこと。対岸の岸壁を良く見ると、岩に人が手を加えた跡が分かり、羅天の栈道の一部と思われる。

明らかに人工で栈道の跡がある対岸



中山道は人家の庭先

三留野宿 41 番目

41 番目の三留野(みどの)宿に到着、旧家が何軒か残っているのみで宿場の遺構は見当たらない。中山道は人家の庭先を通過しており、何となく身をかがめてそっとその庭先を通り抜ける。

道の両側の山々は雲に覆われ、雨つぶが大きくなり、傘をさし、カメラが濡れないように注意しながら歩いていく。



三留野宿のはずれで、道の両側の植木が見事に手入れされているところがあり、人家の庭に迷い込んだのかと一瞬あせってしまった。

庭園の中を歩いている雰囲気



かぶと観音と振袖松

かぶと観音

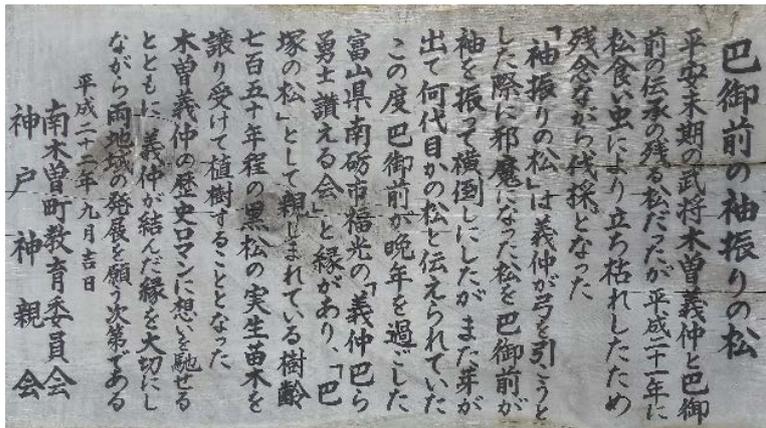


庭園道路の集落の先に、木曾義仲のかぶと観音と巴御前の振袖松がある。かぶと観音の名前の由来は、仏像の体内に義仲の兜の八幡座（兜の一番上）の観音像を納めたことによるとか。

観音を収めている観音堂よりもその前にある鬼瓦の親分のような石造物が面白い。

その横にあるのが振袖松で、由来が書いてある。

良寛碑



この暮れの 物悲しきに若草の妻呼び立てて 小牡鹿鳴くも 良寛

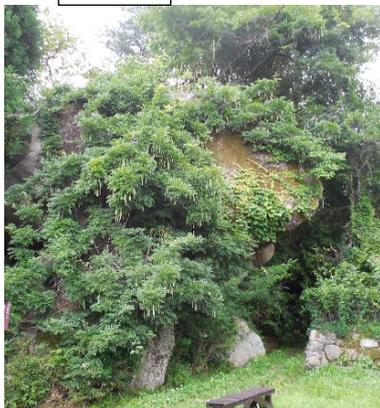


また、上久保一里塚のそばに良寛の歌碑があった。

鯉岩

妻籠城址と妻籠宿まで1Kmの標識があり、旧家がポツリポツリと増えはじめ、有形文化財の旧家の向かい側に鯉岩がある。ネットで調べると、江戸時代の『木曾路名所図会』の鯉岩の絵があった。今は樹木で岩の形は判然としないが、昔は鯉の形をしていたのだろう。

鯉岩



木曾路名所図会の絵



妻籠宿 42 番目

妻籠口留番所跡の標識があり、高札場があり、いよいよ妻籠宿、水車の回る水車小屋の角を曲がるとそこは江戸時代、宿場の建物が両側に並び、いい雰囲気、観光客も多い。

水車の回る水車小屋



妻籠の町並み



まず最初に目についた立派な建物は脇本陣で、見学可能となっており、この脇本陣と歴史資料館・本陣の入館料 700 円也を支払って入館、総檜作りの立派な建物で、説明員の話聞く。奥の土蔵が歴史資料館となっている。そこに木曽檜を製材する為の道具が展示してあった。昔はこんな道具で丸太から板を作っていたのだ。

脇本陣の門



製材用道具



歴史資料館を出ると向かい側が本陣、但しこの本陣は昭和に復元したもの。

本陣の門



この本陣の屋根に石が載せてある、本陣は大ききのそろった丸い石が並べてあるのに対し、一般の民家は不揃いの石を並べている。

民家の屋根の石



大妻籠

妻籠宿を抜け、山道を暫らく歩くと大妻籠、ここは鄙びた集落だが旅籠と間違える程の大きな旧家がある。

大妻籠の旧家



昼寝犬と忠犬

大妻籠の旧家の縁側で犬が昼寝をしていた。近づくと頭を上げて、眠そうな顔でこちらを見たが吠えもしない。

大妻籠を出て、山道を歩いていると「忠犬」の掲示板、このピンクの首輪の犬には是非とも御目にかかりたい。このあたりには、数百 m に 1 個の割合で「熊よけ鐘」が置かれており、見かける度に大きく鳴らした。

忠犬



お昼寝犬

お知らせ「忠犬」

この付近で、犬を使った有害鳥獣の追い払いを実施しています。

この犬は、訓練等をしていますので人などに襲いかかることはありません。

犬は、蛍光色(ピンク)の首輪をしています。もし、犬を見かけた場合は無視をするようにしてください。

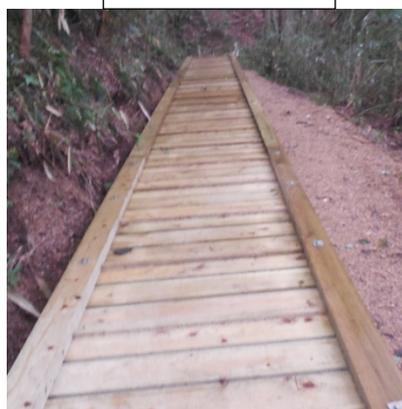
南木曾町産業観光課農林係
0264-57-2001

迷い道と現代の栈道

妻籠と馬籠の間は 7.3Km、人家の無い山道が殆ど、目印の少ない山の中を道路標識どおりに歩いて道に迷ってしまう。時代の異なる複数の中山道があり、ガイドブックによって異なる道となる。男滝女滝の標識のところで、今迄歩いてきた道を標識は馬籠と指し示しており、迷っているところに前方から若い女性の 2 人組が歩いてきて、彼女たちは馬籠からきたことで標識の誤りを確認。山腹をぐるりと回る道なので、途中で分岐すれば標識のとおりになるのかもしれないが。この男滝女滝は吉川英治の宮本武蔵に登場するらしい。女性二人組の後に続いて男滝に寄り道、女滝は遠いので女性二人組とは別れて馬籠へ。

山道はところどころ崩れているところがあり、現代の栈道、木の棧が何箇所もあった。

現代の栈道



妻籠-馬籠間はハイキングコースとして人気があるようで外人のグループにも何組か出会い、みんな「コンニチワ」と声を掛け合う。

馬籠峠の碑と正岡子規の句
白雲や 青葉若葉の 三十里

馬籠峠と猿

坂道を登りきるとそこは自動車道、馬籠峠と書かれた石碑があり標高 801m、子規の句もある。馬籠は、木曾ではあるものの、平成の合併で行政的には長野県から岐阜県中津川市となる。



十返舎一九の狂歌碑



この峠にも「熊出没注意」の標識があり、視界の端に動くものが見え、ギョッとしてそちらを見ると一匹の猿、慌ててカメラを向けると 10 匹程の猿が道路を横切り、しんがりは子猿だった。

峠のすぐ下に集落があり、旧家が残っていて、その先には十返舎一九の狂歌碑がある。「渋皮の剥(む)けし女は見えねども 栗のこはめしここの名物」、古くから栗こわめしを名物にしていた所で、文化 8 年 (1811) に十返舎一九は中山道を旅して「木曾街道膝栗毛」を書いた。

馬籠宿 43 番目



馬籠峠を下ると馬籠宿、観光客が多く、団体さんもゾロゾロ。土産物屋と食べ物の店が続く町並みや建物の外観は、江戸時代の雰囲気を出しているものの、建物自体は比較的新しい様に見える。時刻は 12 時半、食堂はどこも満杯、蕎麦屋さんが多く、昼食は山菜ソバ 750 円也、団体さんの中、隅っこで一人食べる、味はまあまあ。

島崎藤村

入館料 550 円也(何で端数なの?)を支払って藤村記念館に入館、藤村と言えば「夜明け前」高校生の時に読んだ記憶がまだ残っている。その夜明け前の主人公青山半蔵は藤村の父親の島崎正樹をモデルとしていることは有名で、更に「破戒」と小説ばかり頭にあったが、記念館でまず目にしたのは歌集と詩集、まだあげそめし前髪の・・・

きみよりほかにはしるものなき・・・

小諸なる古城のほとり・・・

と記憶にあるものが多い。また BGM として流れていたのは「遠き別れにたえかねて、この高殿に登るかな・・・」で、良く知っている歌の作詞家でもあった。「名も知らぬ遠き島より流れ寄る椰子の実一つ・・・」も。小説で、歌で、詩で、まさに文筆で人に感銘を与えている。

町並みから離れたところに永昌寺なる寺があり、その横にある島崎家の墓に参り、合掌。

島崎家の墓、春樹は藤村の本名、夫人は冬子



ハスの花

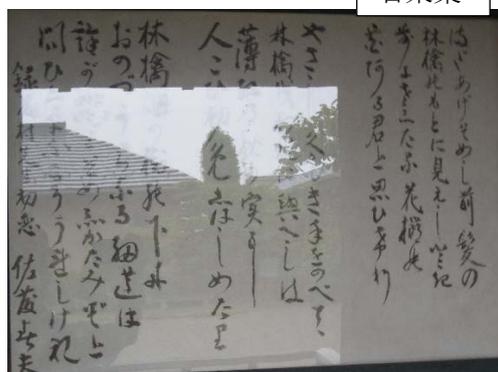


馬籠宿の端にある小さなスーパー、何しろ今朝十二兼駅を出てから初めての商店、でお八つのチョコバーと飲み物を買って、観光客で賑わう馬籠宿を後にして、中山道を歩き始める。雨は降り止まず、周りは霧に覆われ、遠くは見えない。街道の横にある池に咲いていたピンクの蓮の花が綺麗だった。

藤村記念館



若菜集



青山半蔵のモデルの島崎正樹記念碑



子規公園と国境碑

少し歩くと子規公園があり、子規の句碑がある。その向かい側に「是れより北 木曾路」の国境碑があり、木曾に別れを告げて美濃路となる。

是れより北 木曾路



桑の実の
穂麦かな
子規
木曾路出づれば



落合石畳となんじゃもんじゃの杜

雨にけぶる落合石畳



石畳の道のアップダウンが続く。丸い石ではなく、表面が平たく滑らかなので、雨に濡れてとても滑りやすい。山腹に「なんじゃもんじゃの杜」の石碑があり、その付近は「なんじゃもんじゃ」の木の森となっている。どこかの神社で1本だけの「なんじゃもんじゃ」はお目にかかったことがあるが、森は初めて。

なんじゃもんじゃの杜の石碑

なんじゃもんじゃの森



なんじゃもんじゃの森を抜け、更に石畳を歩いていくと「TBS連続ドラマロケ地」の看板があった。内田康夫の推理小説浅見光彦シリーズは全国の観光地を回っているのここにも来たのだろう。山間の集落の寺に芭蕉の句碑、「梅が香に のっと日の出る山路かな はせを」、但し句碑そのものは草木に隠れて写真に撮れない。

馬籠宿から、中山道の舗装は、山間の地道や石畳、自動車道を除いて、写真の様に軽石のような白い石を散りばめたものとなっており、遠くから眺めると花吹雪の様に見える。道を間違えても遠くからこの舗装を見ると中山道が良くわかり地図よりも役に立つ、この舗装は大湫宿まで続いていた。山は下り道となり、やがて木立の間から市街地が見え隠れ、今までの山間の集落から比べると大都会に思われ、中津川盆地に到着したことを知る。



中山道の目印の舗装



中津川の市街地が見える

落合宿 44 番目

美濃路の最初の宿場、落合宿に到着。本陣の立派な門が残っており、人が住んでいて未公開、他に何軒かの旧家もあった。駐車場の一角に大きな釜が置いてあり、「落合宿助け合い大釜」と書かれている。説明板によると「寒天の原料(天草)を煮る為の大釜で、日本の食文化を伝える為と今に再利用する為に、落合宿助け合い大釜と命名、様々なイベントに活用し、千人キノコ汁を作り多くの方々振る舞ったこともある云々」とある。



落合本陣跡



落合お助け大釜

「おがらん」と石仏群



自動車道の陸橋に「おがらん橋」と書かれている。どんな意味かと考えていたら隣の神社に「落合五郎城跡(おがらん様)」の説明板があり、木曾義仲の四天王の一人、落合五郎兼行が当地の出身で、おがらん様として今も親しまれているとのこと。落合五郎がどうしておがらんになるのだろう？その先に子野の地藏堂石仏群があり、その中の一つが頬杖をついて、くつろいだ形をしていて面白かった。



頬杖の石仏

現代の双体道祖神 2つ

子野の石仏群の先に、子供が寄り添う現代の制作の双体道祖神があり、また上金メダカの池の表題でメダカの学校の歌詞が書かれ、その前にこれも現代制作の双体道祖神があり、ネットで由来を調べたが両方共分からない。



中津川宿 45 番目

中津川宿に4時に到着、中津川駅に直行したが、本日宿泊の馬籠行きバスの発車直後。1時間待って次のバスに乗り、馬籠で宿泊。 本日は歩数計を忘れて歩数は不明。

マンホールの蓋

三留野と妻籠はマンホールの蓋は見当たらず。



馬籠



落合

馬籠は行政的には旧山口村でツバキとムラサキツツジが描かれている、落合は石畳を真ん中に周囲は鳥やトンボ、蝶や花や木など自然を表す生物をデザイン。

11日目

